

平成二十五年 度 中学校入学試験問題 国語

◆ 字数制限がある問題は、「、」「や」「。」も一字と数えます。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

愛知万博では、微生物によって分解される生分解性プラスチックでできた食器やゴミ袋を使用したことによって、七二〇トン分の二酸化炭素の排出を削減できたという。トウモロコシを原料とするコップや皿などの食器二〇〇万個、ゴミ袋五万枚を使ったためだ。何度も使い回せる食器で余分なゴミを減らす、二酸化炭素を出さないような製品に変える、などの技術のおかげである。環境との共生を謳った愛知万博らしい成果であったと言える。

しかし、ふと疑問に思うこともある。①道徳が技術に肩代わりされていくことで良いのだろうか、という疑問である。愛知万博では、食器やゴミ袋に環境に優しいものが使われるようになって、何も気にすることなく容器を捨てることができた。これが堆肥になると思えば、使い捨てすることの後ろめたさを薄れさせてしまったのだ。技術が道徳の代行をしてくれたためである。

I、私たちの良心と行動によって地球環境を守るよう求められている。地球に優しいとミズカを感じたことを自発的に実行し、生活まで変えていくこうとする覚悟が重要なのである。そのような意識は人間が持つべき「道徳」として定着しつつある。道徳と言えは堅苦しいが、人間としての行動の規範のことで、そのような発想（環境倫理というべきかもしれない）を身につけた人間が増えていくことこそが人類の未来への希望とも言えるだろう。

II、そのような個人の道徳心を自然に育てるのではなく、②技術によって問題が発生しないように前もって手を打っていくことが増えている。それによって表面的には道徳がキノウしているかのような状態が作り出されるのである。

A、映画館や学校では通信妨害電波を発信して、ケータイを実質的に使えなくする方法が広がり始めている。これによって映画館や学校の静寂が守られるというわけだ。III、クルマの速度制御装置を制限速度以下になるよう設定しておけば、スピード違反をしなくて済む。速度制御装置を取り付けようと考えたのは道徳心から来たものだが、後はそれにおマカせしておけばもはやクルマのスピードのことを考える必要がない。

B、しかし、③技術が発達すれば、その分だけ私たちの能力が失われていくことに注意する必要がある。鉛筆がシャープペンシルに取り替わって子どもたちはナイフを使うことができなくなり、クルマを使うことが増えて走力が衰え、エアコンがあらゆる場所に普及して体が汗をかかなくなった。パソコンを使うようになって漢字の書き方を忘れることも増えた。技術が手や足や体やズノウの役割を肩代わりしてくれることによって、知らず知らずのうちに私たちが原初的に持っていた能力を失っているのだ。

C、これと同じだとすれば、技術が道徳の代行をするうちに、私たちが生来的に持ち、あるいは成長の過程で獲得してきた道徳的な判断力が衰えていくことにならないだろうか。大勢の人がいる場でケータイを使わないのは、人に迷惑になるための配慮ではなく、妨害電波があるためになってしまう。スピード違反をしないのは、事故で人を殺しかねないためではなく、速度制限装置が働いてくれるためになるかもしれない。本来の道徳的な目標が忘れられ、ただ技術が命じるままに行動しているだけになりかねないのだ。

D、このような技術はまだ一部でしか使われていないから考え過ぎと思われそうだが、④それが全面的に広がって当たり前になってしまったらどうなるかを想像する必要があるだろう。ひょっとすると、人々は道徳心を失ったロボット同然の行動しかしなくなるかもしれない。

(E)

回りくどいようだが、人々の道徳心を育て、どのように判断すべきかを決めていける人間であり続けねば、社会は荒廃^{こうはい}してしまうだろう。⑥道徳を技術で置き換えることの危なさを考えておくべきではないだろうか。

(池内丁「科学の落とし穴」ウソではないがホントでもない 一部改)

〈注1〉 謳^{うた}った……そのことをはっきりととりあげた

〈注2〉 規範……従^{したが}うことが求められる行動

問一 本文からは、次の文が抜^ひけています。どこに入れるのが良いですか。(A) (E)の中から選び、記号で答えなさい。

確かに、それらによって公衆の平和と安全が保たれ、地球環境に優しい行為^いが自動的になされるようになるのだから、結構なことと言^いうべきかもしれない。

問二 — 線①「道徳が技術に肩代わりされて」・ — 線③「技術によって手^てを打^うっていく」とは、どのような状態になることですか。次のア～エの中からそれぞれ選んで記号で答えなさい。

①「道徳が技術に肩代わりされて」

- ア 道徳が技術のかわりになって
- イ 技術が道徳のかわりになって
- ウ 道徳が技術よりも優位になって
- エ 技術が道徳よりも優位になって

③「技術によって問題が発生しないように前もって手を打^うっていく」

- ア 技術のせいで問題が発生しないように、前もって必要な方法を準備していく
- イ 技術のせいで問題が発生しないように、前もって必要な方法を予想していく
- ウ 問題が発生しないように、技術を使って前もって必要な方法を準備していく
- エ 問題が発生しないように、技術を使って前もって必要な方法を予想していく

問三 文中の空欄^{くわんらん} I Ⅲ にあてはまる言葉を次のア～キの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア 結局
- イ ところが
- ウ だから
- エ 本来
- オ 時々
- カ たえば
- キ また

問四 — 線②「人類の未来への希望」とありますが、筆者はということが「人類の未来への希望」だと考えていますか。文中の言葉を使って六十字以内で説明しなさい。

問五 — 線④「技術が発達すれば、その分だけ私たちの能力が失われていくこと」の例として、どんなことが考えられますか。本文に挙げられている例とは異なる例を一つ、考えて書きなさい。

問六 — 線⑤「それ」とはどのようなことを指していますか。文中の言葉を使って十字前後で答えなさい。

問七 — 線⑥「道徳を技術で置き換えることの危なさ」とありますが、どのような点が危ないのですか。説明しなさい。

問八 — 線 a～e のカタカナを漢字に直しなさい。a は送りがなも書きなさい。

次の文章は、弓道の団体戦（三人一組で矢を順番に一本ずつ合計十二本射て、的に当たった数を相手校と争う競技）の様子を描いたものです。これを読んで、後の問いに答えなさい。

実良は、早弥と春の一步に合わせて、「Ⅰ」左足を前に出した。待ちきれない右足がそれを追う。本座から、一步、二歩、三歩。この歩き方を「蝶々みたいだ」と早弥に言われたことがある。確かに、実良は的に向かうときはわくわくする。だから「Ⅱ」射位に向かっってしまう。これから始まるのが、楽しみでならないのだ。

「始め」

号令がかかる。

緩やかな所作の間、実良は飛び立つときをじっと待っている。やがてこらえきれないように矢が離れていくとき、自分もしよに飛び立つような気がする。とても心地よい。

調子が悪かったとき、一番辛かったのは、中らなかつたことではない。矢といっしょに飛べなかつたことだった。飛び出す心地よさがなかつたことだ。自分まで、矢道に打ち捨てられたような気持ちになっていた。でも、やめようと考えたことは一度もない。

実良が部活動に弓道を選んだのは、個人競技だったからだ。自分のペースでやれる。射場に立っているときは、一人きりだ。のだけに向かっればよい。その間だけは安全だ。射場は実良のセーフティゾーンだった。

実良は小さなころから、トラブルメーカーだった。どこに行っても、周りから浮いてしまう。教室も家もうんざりするくらいに、居心地が悪かった。

だけど、射場にいれば、だれからもとがめられない。都合の良いことに、自分には弓道のセンスがあった。セーフティゾーンに逃げこめるだけじゃなくて、賞賛ももらえた。的に中つたぶんだけ、自分は肯定される。射場は初めて自分がほめられた場所だ。この弓は、自分がよって立つもの。

実良は弓を構えた。肩の力を抜く代わりに、背中筋肉に力を入れる。すべての思考を止めた。矢がうまく飛ぶには、弓と弦にこめた力だけではだめなのだ。自分の集中がいる。

「Ⅲ」眉間に力が入った。次の瞬間、目の奥がフラッシュをたいたように、真っ白になり、「Ⅳ」体が軽くなった。ぱんつと矢が的を射た。

次の矢は早弥が射たら、速攻で射よう。

思いついて、実良はすぐさま矢を番える。こちらが続けざまに中りを出すと、相手には相当のプレッシャーになるはずだ。

実良はタイミングを計った。ぱんつと早弥の矢が的を射た瞬間に、自分の矢も的に中てた。早弥の息合いがわかった。ぴつたり自分の呼吸と重なった。

やったね、早弥ちゃん。

このごろ気づいたことがある。個人競技だとばかり思っていた弓道が、実はそうではないことに。的に向かっていたのは、自分だけではない。春、そして、早弥も同じように向かっている。おそらく同じ気持ちで。それがわかったときに、なんとも言えない強い気持ちになった。そして気がついた。弓は自分にとって、一番大事なものだと思っていたけれど、もしかすると、もっと大事なものは、仲間かもしれない。一人きりではない。

② だからやめられない。

ぱんつ。

③ いつの間にか、手元の矢は最後の一本になっている。

帰ってこられてよかった。と心から思う。去年は応援ばかりで、つまらなかった。今にも射場に飛び出していきたくて、むずむずしていた。

あの的をたくさん射抜きたい。かすつてばかりだった的に、十か月分のお返しをしてやるのだ。実良は丹田に力を入れた。

春は本座から三步前へ出た。早弥と実良の歩みそのまま自分のリズムになる。射位について、くつと目を見開いた。懐をぎゅつと握る。硬くてとがった手こたえを感じる。ここにお守りが入っている。矢の形のキーホルダー。それを握りこんだ春は矢を番えた。

「始め」

号令が体にしみこんだ。

一射目の矢は、慎重にねらった。十分な間をとって射を射る。

相手は全国の覇者だ。ちよつとやそつとじゃ崩れないだろう。それなら粘っていくしかない。

春は途中から、実良が積極的^④に仕掛けてい^るのを感じていた。

自分は、落ちつかなければ。

予想どおり、耳には快音が響いている。まだだれも外していない。

自分も的中だけが欲しい。仲間といっしょに全国に行きたい。なんとしても。

(中略)

自分ももっと強くなりたい。そして、大きな世界が見たい。いろんな出会いが欲しい。日本で武道と出会ったように。早弥や実良と出会ったように。

おれは、世界に自分が生きた証を残すのだ！

春は的に向かう。この的はその一步。ねらなくてもいいというが、自分はまだねらいたい。しっかりねらつて、全国を勝ち取りたい。この手で。

春は力をこめた矢で、的を破った。

「終了」

審判の右手が上がった。

早弥は「V」我に返った。とつさに掲示板を確認する。×が一つだけついていた。

どっち？

確かめようとしたとき、審判の声がきこえた。エコーがかかったような声だった。なぜかダブっていくつもきこえる。ききとりづらい声を、懸命に耳でつなぎ合わせる。

「光陵中学校の勝ち」

一瞬、目の前のすべてのものが動きを止めた。

勝った。

静止した光景の向こうから、実良が大きく腕を広げてかけ寄ってくるのが見えた。早弥はそれを反射的に受け止めた。

春もかけ寄ってくる。春の大きな手が二人の肩を包みこむ。

大きな拍手がきこえた。胸に言いようもない、熱さがこみ上げてきた。

実良が熱い。春も熱い。三人の重なったところをもっと熱い。ここが喜ぶなのかもしれない、と早弥は感じた。

喜びつて、人と人とがふれ合ったところから生まれるのかもしれない。

早弥は実良と春を力いっぱい抱きしめた。

(まはら三桃「たまごを持つように」一部改)

〈注1〉本座……矢を射る前に控^{ひか}える所

〈注2〉射位……矢を射る所

〈注3〉所作……一定の形式にのつとつた動作

〈注4〉矢道……射場からの置かれてある所までの芝^{しば}生の部分

〈注5〉セーフティゾーン……安全地帯

〈注6〉トラブルメーカー……もめごとを起こす人

〈注7〉番える……射るために矢の末端^{たんぽん}を矢の弦^{つる}にかけること

〈注8〉丹田……おへその下のあたり

〈注9〉覇者……競技などで優勝した者

問一 文中の「I」「V」に入れるのに最もふさわしい言葉をそれぞれの次のア～カの中から選んで、記号で答えなさい。

ア はつと イ ひらりと ウ しんみりと エ ふつと オ ぐつと カ いそいそと

問二 〃線a「中らなかつた」とありますが、ここで使われている「中」という漢字の意味に最も近い意味で「中」が使われている四字熟語を、次のア～エの中から選び記号で答えなさい。

ア 暗中模索 イ 五里霧^い中 ウ 百発百中 エ 無我夢^が中

問三 〃線①「やめようと考えたことは一度もない」・〃線②「だからやめられない」とありますが、それぞれの「やめない」理由を四十字以内で説明しなさい。

問四 〃線③「いつの間にか、手元の矢は最後の一本になっている。」とありますが、この表現から実良がどのような状態で矢を射ていたことが読み取れますか。考えて答えなさい。

問五 〃線④「実良が積極的に仕掛けていたのを感じていた」とありますが、この「仕掛けている」様子が具体的に描かれている箇所を探し、その箇所の最初の五文字を抜き出しなさい。

問六 〃線⑤「熱さ」について、次の問いに答えなさい。

(1) 「熱さ」とはどのようなものですか。文中の言葉を用いて二十字前後で答えなさい。

(2) この「熱さ」というものを、実良の場面ではどのように表現していますか。実良の気持ちを表す言葉を探し、「気持ち」に続く形で十字以内で抜き出しなさい。

問七 この物語の表現の特色として適切なものを次の中から二つ選んで、記号で答えなさい。

ア 短い文の積み重ねから生まれるテンポのよい描写^{びやう}によって、登場人物が読者のすぐそばで射場に臨^{のぞ}んでいるような感じを与える。

イ 弓道にかける思いについて、三人それぞれの回想を交えながら描いていくことで、一人一人が抱^{かか}える複雑な内面が、細やかに表現されている。

ウ 常に冷静さを失わず、敵の動きを的確^{とく}に捉えながら試合に臨む三人の心情が、第三者の視点から淡々^{たんたん}とした言葉によって表現されている。

エ 物事の状態や様子を感覚的に音声化して表現する語を多く用いることによって、登場人物の心情が生々しく描かれ、また、倒置^{たうち}法を用いることで気持ちが強調されている。

オ 比喩^{ひよ}表現や感覚的な表現を多く用いることで、緊張感みなぎる射場で自分自身と戦う三人の、深い悩^{なや}みを抱えた傷つきやすい内面が詩的に表現されている。

国語解答用紙

驗号	
受番	
氏名	

❖ 字数制限がある問題は、「、」や「。」もすべて一字と数えます。

--	--

問一	
問二	①
	③

I	
II	
III	

[illegible]

問五

問六

問七

問八	a	
	b	
	c	
	む	
	d	
	お	
	せ	
	e	

二

問一	I	
	II	
	III	
	IV	
	V	
問二		

[illegible][illegible]

問四

問五

[illegible]

(2)

気持ち。

10字